

Title	羽島知之・山名隆三氏より提供された近代沖縄の新聞
Author(s)	下地, 智子
Citation	史料編集室紀要(33): 33-37
Issue Date	2008-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12001/8311">http://hdl.handle.net/20.500.12001/8311</a>
Rights	沖縄県教育委員会

## 羽島知之・山名隆三氏より提供された近代沖縄の新聞

下地 智子

### はじめに

近年、日本各地で、近代の沖縄の新聞が発見されている。1998年東京大学<sup>(1)</sup>、2001年福岡県立図書館<sup>(2)</sup>、2001年東京<sup>(3)</sup>、2002年・2003年京都大学<sup>(4)</sup>、2005年和歌山県<sup>(5)</sup>といった具合である。1998年東京大学、2002年・2003年京都大学、2005年和歌山県は、採集した植物標本をはさんだもので、分量は多いが紙面には欠損や書き込みがあり、状態は良好とは言えない。しかし、今後近代の新聞がみつかるのであれば、このような植物標本収集からが最も可能性が高いだろう。

2007年10月、東京都在住の羽島知之氏・滋賀県在住の山名隆三氏から、近代の沖縄の新聞の複製が沖縄県に寄贈された<sup>(6)</sup>。2001年に発見・報道された紙面を含む12日分である。植物標本から得られた新聞に比べると、分量は少ない。だが、各号の全ページがそろい、欠損はわずかで、紙面の状態は良好である。さらに資料的価値も高い。『沖縄毎日新報』の紙面が確認されたのはこれが初めてであり、『沖縄朝日新聞』は切り抜き資料を除けば最も古い紙面である。ほかの『沖縄新聞』『沖縄タイムス』『琉球新報』『沖縄日報』いずれも現存する紙面が少ないなかで、完全な形で残っているのは珍しく、貴重である。内容も、移民や沖縄県・市町村議会および議員選挙、沖縄県立第二中学校の創立25周年記念式

---

SHIMOJI Satoko: Okinawan Newspapers Donated by Hajima Tomoyuki and Yamana Ryuzo

- (1) 『琉球新報』1998年10月27日夕刊、当山昌直「東大明治新聞雑誌文庫に新たに収蔵された戦前の沖縄の新聞」(『史料編集室紀要』第24号、沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編、沖縄県教育委員会、1999年)
- (2) 『琉球新報』2001年1月5日朝刊、『沖縄タイムス』2001年1月5日夕刊
- (3) 『沖縄タイムス』2001年8月3日夕刊
- (4) 当山昌直「収蔵資料散歩 植物標本がもたらした遺産」(『京都大学総合博物館ニュースレター』15、京都大学総合博物館編集・発行、2003年)、『沖縄タイムス』2003年7月11日朝刊、『琉球新報』2003年7月17日夕刊
- (5) 『沖縄タイムス』『琉球新報』2005年12月28日朝刊、『沖縄県史研究叢書17 植物標本より得られた近代沖縄の新聞』沖縄県文化振興会公文書館管理部史料編集室編、沖縄県教育委員会、2007年
- (6) 『沖縄タイムス』2007年10月28日朝刊、『琉球新報』2007年10月29日夕刊

典に関する記事が見え、近代沖縄の記録の空白を埋めるピースとなる。

羽島・山名両氏の収集努力とご厚意に感謝しつつ、提供された新聞について紹介したい。

## 1. 提供された紙面

羽島・山名両氏から複製が提供された新聞は、『沖縄新聞』2日分、『沖縄毎日新報』3日分、『沖縄朝日新聞』3日分、『沖縄タイムス』2日分、『琉球新報』1日分、『沖縄日報』1日分の、6紙の12日分である。以下に一覧する。『沖縄毎日新報』1919年（大正8）12月12日付に少々欠損があるが、紙面はおおむね完全な形で現存する。

表1 羽島知之・山名隆三氏より提供された近代沖縄の新聞一覧

新聞名	発刊年月日	号数	現存ページ	原紙所蔵者	備考
沖縄新聞	1906年(明治39) 5月14日	94	第1～4面	羽島知之	
沖縄新聞	1906年(明治39) 5月24日	99	第1～4面	羽島知之	
沖縄毎日新報	1919年(大正8) 7月18日	3604	第1～4面	羽島知之	
沖縄毎日新報	1919年(大正8) 12月12日	3735	第1～4面	羽島知之	第1, 2面下部に欠損あり
沖縄毎日新報	1920年(大正9) 2月5日	3774	第1～4面	羽島知之	
沖縄朝日新聞	1919年(大正8) 12月17日	1450	第1～4面	羽島知之	
沖縄朝日新聞	1919年(大正8) 12月24日	1457	第1～4面	羽島知之	
沖縄朝日新聞	1920年(大正9) 1月18日	1478	第1～4面	羽島知之	
沖縄タイムス	1925年(大正14) 10月24日	1655	第1～4面	羽島知之	
沖縄タイムス	1926年(大正15) 9月28日	1981	第1～4面	山名隆三	
琉球新報	1929年(昭和4) 5月30日	10186	第1～4面	山名隆三	
沖縄日報	1935年(昭和10) 11月23日	1341	第1～4面	羽島知之	

これらの紙面を、羽島・山名氏は古書店や骨董市でみつけ、購入した。仕事の関係で沖縄を訪れた県外出身者が本土へ持ち帰ったり、本土に住む沖縄出身者へ送ったりした紙面が偶然残ったものだと思われる。

## 2. 資料的価値

では、今回提供された新聞は資料的にどのような意味を持つのだろうか。「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノートⅠ～Ⅲ」<sup>(7)</sup>および『沖縄県史研究叢書17 植物標本より得られた近代沖縄の新聞』の一覧と照合してみると、提供された全紙面は新発見のものであることがわかる<sup>(8)</sup>。

さらに個別にみると、『沖縄毎日新報』の紙面が確認されたのは初めてで、1915年（大正4）1月1日に『沖縄毎日新聞』から改題した後の発行人や社の所在地等の変遷もこれで確認できる。発行兼編集人は、『沖縄毎日新聞』1914年（大正3）12月31日現在は名城嗣治だが、『沖縄毎日新報』1919年（大正8）から1920年（大正9）にかけては渡嘉敷唯錦となっている。社の所在地は、『沖縄毎日新聞』1914年（大正3）12月31日現在は那覇区下泉町2丁目19番地、『沖縄毎日新報』1919年（大正8）7月18日現在には那覇西新町2丁目22番地、1920年（大正9）2月5日には那覇上之倉2丁目21番地へと移る。

『沖縄朝日新聞』1919年（大正8）12月17日、24日、1920年（大正9）1月18日付は、名護博物館所蔵の宮城真治切り抜き資料の1919年（大正8）8月26日付を除けば、もっとも古い紙面である。『琉球新報』1929年（昭和4）、『沖縄日報』1935年（昭和10）はそれぞれ現存する紙面がわずかな年の貴重なものであるし、他の紙面についても全ページが残存する点において資料的価値が高い。

- 
- (7) 当山昌直・下地智子「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノート」（『史料編集室紀要』第28号、沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編、沖縄県教育委員会、2003年）  
当山昌直「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノートⅡ」（『史料編集室紀要』第29号、沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編、沖縄県教育委員会、2004年）  
当山昌直「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノートⅢ」（『史料編集室紀要』第30号、沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室編、沖縄県教育委員会、2005年）
- (8) 『沖縄新聞』第94号、第99号、『沖縄毎日新報』第3735号、『沖縄朝日新聞』第1450号は、「沖縄島で発刊された戦前の新聞に関する収集ノート」（2003年）の一覧に載っているが、このとき紙面は未確認であった。

### 3. 内容

言うまでもなく、新聞には多くの情報が詰まっている。ざっと見ただけでも、吏員・教員・警官等公務員の任免、学校教育の内容や入試科目、黒糖や鯉節の相場、天気についての記事が常に掲載されている。また、広告によって、職業、店舗、食べ物、物価、演劇、映画といった当時の経済状況や流行をうかがい知ることができる。

今回提供された紙面のなかでは、沖縄県・市町村議会および選挙についての記事が目立つ。記録が乏しいこの時期においては貴重な情報となるだろう。見出しを拾いあげておく。なお、旧字体は新字体に改めた。

『沖縄毎日新報』1919年（大正8）12月12日

「十四回沖縄県会（九日目）」「中頭郡村長会」「島尻郡会評議員会」「浦添村会」「北谷村会」

『沖縄朝日新聞』1919年（大正8）12月17日

「県会流会」「島尻吏員全部増俸」「山城区長披露宴」

『沖縄朝日新聞』1919年（大正8）12月24日

「首里市制」「県議県外視察」「首里区議協議会」

『沖縄朝日新聞』1920年（大正9）1月18日

「島尻町村長会 第二日目」「糖税全廃に県町村会が蹶起」

『沖縄タイムス』1926年（大正15）9月28日

「激戦を演じた糸満町長選挙」

『琉球新報』1929年（昭和4）5月30日

「佐敷村会招集」「仲里村長に高良氏再選」「市議選行進曲（二）」

「重大化した首里汀良町の暴動事件」「今日招集される那覇市参事会」

『沖縄日報』1935年（昭和10）11月23日

「那覇首里両市の選肅講演会」

また、文芸に関して目ぼしいものとしては、

「象徴詩と其表現（三）上里春生」（『沖縄朝日新聞』1919年〔大正8〕12月17日）

「随筆 妻として（中）池宮城美登子」（『沖縄タイムス』1925年〔大正14〕10月24日）

「同人雑誌街灯を読む（上）齋藤秋雄」（『沖縄タイムス』1926年〔大正15〕9月28日）

「組踊に現はれた琉球の古語 (五) 伊波普猷」(『琉球新報』1929年〔昭和4〕5月30日)

が挙げられる。いずれも連載の一部で、今のところ全連載を確認できない。上里春生、池宮城美登子、伊波普猷各論文・随筆は、新発見の資料である。

移民については広告が多く見られる。関連記事としては、『沖縄毎日新報』1919年(大正8)7月18日の「布哇に於ける県人の活動振り(十一)」、『琉球新報』1929年(昭和4)5月30日の「南洋の宝庫 拓くべき新天地 比島ダバオ近情(四) 伊藝新助」「本県の移民を待つ南米のよき土」「経費六千二百余円を投じて建設される移民収容所」といったものがある。広告や連載記事で、移民を促していたことがうかがえる。

教育関係では、『沖縄日報』1935年(昭和10)11月23日の沖縄県立第二中学校の創立25周年特集を挙げておきたい。第1面「二中校思ひ出の写真集(1)」、第2面「先代三校長の思出」、第3面「夫人令嬢を伴つて十八年振りの出覇 想ひは懐しの母校県立二中 八重山の吉野博士」「明朗二中への祝辞 東恩納寛惇」、第4面「“二中スピリットの下に!” 志喜屋校長の喜び」「城嶽学園、誇りの日 けふ“二中祭り”開く」というように、全面に沖縄県立第二中学校に関する記事があふれている。校舎の写真や記念式典のプログラムまで掲載されており、重要な記録である。

おわりに

資料の乏しい近代沖縄において、新聞は第一級の資料として扱われてきた。しかし、周知のとおり、1918年(大正7)から1945年(昭和20)までの大きな空白が存在する。資料が現存しない以上、この約30年間の沖縄の状況がどのようなものだったか、知ることは困難だと考えられてきた。ところが近年、新聞の発見が相次いだ。空白を全部埋めるにはまだ足りないけれども、資料の断片を並べれば、近代の沖縄像を徐々に浮かび上がらせることができるかもしれない。人が物を処分するとき、真っ先に捨てられるのは新聞だろう。それが100年近く経った今に残存するのは、いくつかの偶然が重なった結果だが、植物標本や骨董市から新聞を見つけ出すのは、人の努力である。近年の新しい新聞の発見は、貴重な資料を散逸させたくない、情報をたくさんの人と共有したいという収集家や研究者の思いと努力の結晶だと言える。双方の努力と相互協力によって、これからも、資料の断片が集められ、空白が少しずつ埋められていくことだろう。